２．戦後 70 年・我孫子市平和都市宣言 30 年記念平和事業

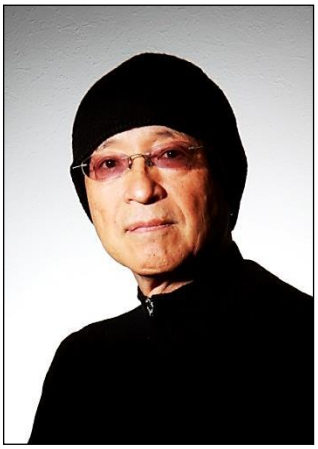
戦後 70 年・我孫子市平和都市宣言 30 年記念平和事業では、戦争や原爆を体験された方が少なくなる中、この悲惨な経験を語り継ぎ、平和について考えていくためには、より若い世代にも平和事業に携わってもらうことが必要と考え、これまでに広島や長崎に派遣された経験をもつ当時の中学生（現在は、社会人・大学生・高校生）にも参加してもらい、さまざまな平和事業を実施しました。

（１）部会事業

我孫子市平和事業推進市民会議（戦後 70 年運営委員会）の委員 28 名は、「イベント」「ホームページ」「小中学校関連」「記念誌」の４つの部会に分かれ、戦後 70 年・我孫子市平和都市宣言 30 年記念平和事業を企画し実施しました。

“GROUND ZERO 平和の祈り 2015”
宮角孝雄 写真展

開催期間　９月 18 日（金）～30 日（水）
開催場所　市民プラザギャラリー



被爆２世の写真家　宮角孝雄（みやかくたかお）さんの作品約 20 点を展示し、500 人を超える方々が来場しました。作品の中には、平成 25 年度と 27 年度に広島の原爆ドーム前で撮影していただいた派遣中学生の写真もありました。

写真（上）：　宮角孝雄さん
写真（左）：　写真展 PR 用チラシ
写真（下）：　原爆ドーム前での撮影の様子

GROUND ZERO 平和の祈り’１５

私は祖父と父が広島駅で、継母が広島市内白島線の電車内で被爆した被爆２世です。世界で最初に原爆が投下された都市広島。悍ましい（おぞましい）負の遺産の象徴である「原爆ドーム」から訴えかけてくる強いメッセージに心を動かされて、世紀末の 2000 年から、毎年８月６日（広島原爆投下の日）、８月９日（長崎原爆投下の日）、正月等滞在した時 15 年間撮影しました。

写真は広島原爆ドームと、長崎平和記念公園で、世界中から訪れた人々に声をかけ、平和を考えて下さいとお願いし、その姿を撮影したものです。祈る人、仏像の様な人、想像している人・・・この写真の中の人々から『平和』を考えてみていただけると幸いです。現在も地球上では、貧富の差は広がり、戦争が行われ、核保有国は増え、核兵器が何時テロリストの手に渡るかもしれません。核の問題は国を超え世界が一体となり広い視野で考える必要を感じます。今年日本は、被爆、不戦 70 年になりました。

唯一の被爆国である経験から、核兵器廃絶と核の安全問題を、世界にアピールする必要があると思います。

その中で、私は我孫子市が催す中学生の広島での平和学習に感銘を受けました。それは、感受性が強い子供達が世界各国から広島や長崎に集い、平和について学習をし、話し会い友好活動をする事で、彼等らが社会人になった時、世界中に平和のネットワークが構築されると思うからです。私は、今年『平和都市宣言 30 年』記念、『平和の灯』点火記念の我孫子市での写真展開催に大きな意義を感じました。市民の皆様に忠信より御礼申し上げます。

本日はご来場、ご高覧有り難う御座いました。

宮角孝雄

第 17 回　国際交流スピーチ大会
（テーマ：平和を含む国際交流）

開 催 日　９月 27 日（日）
開催場所　市民プラザホール

我孫子市国際交流協会（AIRA）との共催により、第 17 回国際交流スピーチ大会を開催しました。英語の部には中学生４名と大学生１名が出場し、日本語の部には大学生３名と社会人３名の外国籍の皆さんが出場しました。出場者の皆さんは、平和を含む国際交流をテーマに熱弁をふるいました。

写真（上）：スピーチする菅野麗さん
写真（下）：講演する宮角孝雄さん

今回の記念事業に合わせて特別に設けた「国際平和特別賞」は、平成 27 年度派遣中学生として広島に行った湖北台中の菅野麗さんが受賞しました。

菅野さんは『広島に行って感じたこと』を演題に、「私たちの世代が、原爆や戦争のことを直接聞ける最後の世代と言われている。知ることができるうちにたくさんのことを知り、聞けるうちにたくさんのことを聞く。そうやって、次へ次へと繋げていくことで、今よりもっと平和な世界を築けると思う」とスピーチしました。

また、写真展開催中の写真家・宮角孝雄さんにも『写真と平和』をテーマに講演いただきました。

宮角さんは、ご家族の被爆体験のほか、ライフワークとして原爆ドーム前で平和を祈る人を撮り続けている理由などをお話くださいました。

我孫子市平和事業ブログの開設
「我孫子から平和を願う」

市民会議の委員が中心となり、戦後 70 年・我孫子市平和都市宣言 30 年特設ブログ「我孫子から平和を願う」を開設しました。

ブログでは、戦後 70 年に市が実施する平和事業のＰＲのほか、平和に関する本や映画の紹介などを行いました。

◆　　ブログ掲載記事一覧　（★…記念誌掲載）

掲載日	タイトル
H27.5.3	○ 戦後 70 年・我孫子市平和都市宣言 30 年記念平和事業を開設します！
H27.5.4	○ 平和事業ブログ開設によせて　-我孫子市長　星野順一郎-
H27.5.5	○ ご存知ですか、我孫子の平和記念碑　★
H27.5.16	○ 【絵本の紹介】へいわってすてきだね
H27.6.6	○ 我孫子市平和事業推進市民会議の紹介 ○ 小学校リレー講座部会の検討会の様子から
H27.6.16	○ 【本・映画の紹介】父と暮らせば　★
H27.6.24	○ 平和への願い　-我孫子市教育長　倉部俊治- ○ 【映画の紹介】ヒロシマナガサキ ○ 【上映会案内】映画「ひろしま」
H27.6.27	○ 【コミック・映画の紹介】夕凪の街 桜の国　★ ○ 【杉村楚人冠記念館企画展】戦時下のアサヒグラフ
H27.7.4	○ 【本の紹介】原爆の図、ひろしまのピカ、原爆の図物語
H27.7.7	○ 平和の願いを折鶴に！
H27.7.8	○ 朗読劇「この子たちを忘れない」 ○ 「焼き場に立つ少年」とジョー・オダネル氏
H27.7.16	○ 被爆アオギリ二世と被爆クスノキ二世　★ ○ 中央学院大学「平和学」が【広島・長崎講座】に認定
H27.7.22	○ 広島の女性が英議会で被爆証言

掲載日	タイトル
H27.7.26	○ 佐々木祐滋さん我孫子へ　・本の紹介「禎子の千羽鶴」
H27.7.29	○ 我孫子市原爆被爆者の会　★ ○ 偵察機で臨んだ太平洋戦争の日々（田中三也さんにお話を聞く）前篇　★ ○ 【本の紹介】原爆供養塔　★
H27.7.30	○ 被爆 70 周年我孫子市平和祈念式典・映画『アオギリにたくして』上映会
H27.8.3	○ 【我孫子市平和事業】広島・長崎への中学生派遣
H27.8.10	○ 広報あびこ８月１日号に平和事業特集記事
H27.8.11	○ 市内中学生 24 名が広島平和記念式典に参列
H27.8.18	○ 被爆 70 周年我孫子市平和祈念式典が開催されました ○ 【絵本の紹介】いわたくんちのおばあちゃん　★
H27.8.25	○ 【広島・長崎中学生リレー講座】我孫子第一小 平和の木
H27.9.1	○ 【戦後 70 年・我孫子市平和都市宣言 30 年記念誌】の原稿を募集します！
H27.9.4	○ 宮角孝雄写真展“GROUND ZERO 平和の祈り 2015”を開催します
H27.9.6	○ 佐々木禎子さんの折り鶴が我孫子市に寄贈されます！
H27.9.13	○ 偵察機で臨んだ太平洋戦争の日々（田中三也さんにお話を聞く）後編
H27.9.28	○ 【本の紹介】14 歳 ＜フォーティン＞
H27.10.7	○ 中央学院大学あびこ祭「平和をつなぐ-原爆投下から 70 年」
H27.10.9	○ 国際交流スピーチ大会：広島に行って感じたこと（湖北台中２年 菅野麗さん）
H27.10.20	○ 【本の紹介】ひめゆりの沖縄戦
H27.10.27	○ 【CD の紹介】吉永小百合 詩の朗読：第二楽章
H27.10.31	○ 派遣中学生リレー講座が東京新聞で紹介されました
H27.11.4	○ 長崎で「パグウォッシュ会議」開幕
H27.11.10	○ リレー講座に参加して
H27.11.11	○ 【映画の紹介】原爆の子
H27.11.12	○ 【本の紹介】ユキは十七歳 特攻で死んだ
H27.11.16	○ 【案内】平和の集い ○ 【本の紹介】対馬丸

掲載日	タイトル
H27.11.29	○ サダコ鶴の寄贈が読売・東京・朝日の各紙で紹介されました
H27.12.4	○ 手賀沼殉難教育者の碑の除幕式
H27.12.5	○ 【本の紹介】世界の果てのこどもたち　★
H27.12.17	○ 禎子鶴の常設展示が始まりました（アビスタ） ○ 12 月 6 日、[平和の集い]が開催されました
H28.1.20	○ 我孫子市：北朝鮮水爆実験に抗議
H28.1.22	○ 手賀沼公園に陽光桜が植樹されました
H27.2.15	○ 【本の紹介】報復ではなく和解を　★

以下、ブログに掲載した記事から抜粋したものです。

ご存知ですか、我孫子の平和記念碑

みなさんは、手賀沼公園の一角に平和記念碑があることをご存知でしたか？

今から 30 年前の昭和 60 年、広島市が原爆で被爆した市庁舎を解体することを聞きつけた、我孫子市原爆被爆者の会が、「後世に原爆の恐ろしさ、悲惨さを伝え、若い人たちに平和の尊さを知ってもらうためにも、石を碑として残したい」との思いから、強く働きかけを行い、ついに広島市から譲り受けることとなったものです。

手賀沼公園の平和の記念碑

これらは「平和都市宣言」の記念事業のひとつとして、1986 年(昭和 61 年)８月６日に手賀沼公園に配置され、その前で毎年８月に平和祈念式典が開催されています。

原爆死没者慰霊碑（広島）

実はこの記念碑は、あるものをモデルに作られています。それは、広島市平和記念公園にある原爆死没者慰霊碑です。

慰霊碑は彼方に原爆ドームを望み、その内部には「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませんから」という鎮魂の石碑が建っています。

我孫子市の平和の記念碑は、広島の原爆死没者慰霊碑では彼方に原爆ドームを望む、ちょうど同じ箇所に、譲り受けた被爆壁が供えられており、とても感慨深く思われます。

皆さんも手賀沼公園においでの際には、ぜひ平和の記念碑にお立ち寄りください。

（我孫子市平和事業推進市民会議・M男）

【本・映画の紹介】父と暮せば

－【本（戯曲）】－－－－－－－－－－－－－－－
書　名　　父と暮せば
著　者　　井上ひさし
出版社　　新潮社
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

－【映画】－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
出　演　　宮沢りえ
　　原田芳雄
　　浅野忠信
監　督　　黒木和雄
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

戯曲の作者は、「ひょっこりひょうたん島」や「吉里吉里人」の作者である井上ひさし。広島に暮らしていた父娘の被爆後を描いています。

映画では、娘を宮沢りえさん、父を原田芳雄さんが演じています。

原爆がどれほど人々の暮らしと心を踏みにじったかが描かれていますが、映画を観て印象に残るのは、宮沢りえさんの広島弁の語り。

広島に限らずどこの地方のことば(方言)であれ同じだと思いますが、ことばには、そこに根づいて暮らす人たちの生活の歴史とそこから滲み出る情感が込められています。宮沢りえさんの広島弁にはそんな情感が強く感じられ、たいへん心に沁みます。

原爆はそうしたことばで暮らす人たちの生活の歴史を断ち切り、心を踏みにじっていったのだということが、読む者、観る者の記憶に刻み込まれる作品です。

井上ひさしの原作なので、筆致はむしろユーモアに溢れています。だからこそなお、原爆が何をもたらしたのかが、却って忘れられないメッセージとして伝わってきます。

広島弁に馴染みのない方は、映画を観てから戯曲を読むと、紙面の広島弁から広島に暮らしていた人びとの情感が一層伝わってくるかもしれません。
おすすめの本と映画です。

今年の 12 月に、山田洋次監督の「母と暮せば」という作品が公開されます。広島、長崎、沖縄を描いた作品を残したいと考えていた井上ひさしの遺志を引き継いで、長崎をテーマに、「父と暮せば」のシチュエーションをなぞって製作されているようです。出演は、吉永さゆりさん（母役）、二宮和也さん（息子役）。

戦後 70 年に、山田洋次監督が長崎を舞台に描くこの作品も、是非観たいものです。

■「母と暮らせば」公式サイト　http://hahatokuraseba.jp/

（我孫子市平和事業推進市民会議　恒）

【コミック・映画の紹介】夕凪の街 桜の国

-【コミック】----------

書　名　夕凪の街 桜の国
作　者　こうの史代
出版社　双葉社

-【映画】----------

タイトル　夕凪の街 桜の国
出　　演　麻生久美子
　　田中麗奈
　　堺 正章
監　　督　佐々部清
封　　切　2007 年 7 月

漫画家こうの史代さんのコミック「夕凪の街 桜の国」と、それを原作として2007 年に製作された映画です。

前半の「夕凪の街」は広島で被爆した女性の話、後半の「桜の国」は被爆２世の女性とその家族の話です。

「夕凪の街」は原爆投下から 13 年後の広島が舞台です。
淡々とした物語の中、消えることのない傷跡を抱えた身体、幸せを感じる度にフラッシュバックする原爆投下直後の広島の様子。

なかでも印象的なのが主人公の
「誰かに死ねばいいと思われたのに生きてる」
「原爆は落ちたんじゃなくて落とされたんよ」
というセリフです。

戦争が終わってもなお、苦しみが続くことが痛々しいほどに描かれています。

終戦後、復興していく夕凪の街で、強く生きていこうとする女性の姿。そんな彼女に振りかかる、無情なまでの悲しい運命に心を締めつけられます。

「桜の国」は私達が今生きている、平成が舞台です。

この物語の主人公は「夕凪の街」の主人公の姪にあたる女性。突然何も告げずに広島に出向いた父を追ったことから、被爆した母の死、弟の病気、弟が恋人との結婚を恋人の両親から反対されていることなど、主人公を取り巻く原爆の影と向き合っていくことになる主人公の姿、被爆２世への世間の目が描かれています。

原爆の悲劇はその時だけで終わらない。次の世代である現代にも悲劇や苦しみが続いているという、悲しくて恐ろしい現実が桜の街から伝わってきます。

どちらも淡々と進んでいく物語の中に、二人の女性の平和への祈りが、静かに強く伝わってくるでしょう。そして同時に現代の平和な日本に生きる私たちに戦争、原爆、平和について考えさせられる物語です。

是非ご一読、ご鑑賞下さい。あなたにとって平和とはなんですか？

（我孫子市平和事業推進市民会議　まゆ：大学生）

被爆アオギリ二世と被爆クスノキ二世

被爆アオギリ二世

被爆クスノキ二世

手賀沼公園の水辺近くに、平和の記念樹が２本並んで植えられています。
１本は広島市から譲り受けた「被爆アオギリ二世」。もう１本は長崎市から頂いた「被爆クスノキ二世」です。

アオギリ二世は広島爆心地から 1.3 キロメートルで被爆したアオギリの子孫。クスノキ二世は長崎の爆心地から 800 メートルで被爆したクスノキの子孫です。

当初は、原爆投下後は数十年間草木も生えないと言われていましたが、アオギリもクスノキも、奇跡的に生き延びて新たな葉を芽吹き、その姿は打ちのめされた人々に生きる勇気と希望を与えました。

広島市と長崎市は、これらの親木から種を取って苗を育て、全国の自治体に寄贈して下さっています。

我孫子市も３年前の 2012 年（平成 24 年）８月 11 日、両市から頂いたこの貴重な苗を、被爆 67 周年平和祈念式典の中、星野市長をはじめ我孫子市原爆被爆者の会メンバーや長崎派遣中学生たちの手によって植樹しました。

「平和」と「命」のシンボルとして、広島・長崎と我孫子の架け橋として、手賀沼の光と涼風を受けながらアオギリとクスノキが大きく育ってくれることを願っています。

（我孫子市平和事業推進市民会議・M男）

歌手の福山雅治さんが、長崎の被爆クスノキを題材にした「クスノキ」という歌をつくっています。アルバム「HUMAN」の１曲目におさめられています。長崎生まれの福山さんは、被爆クスノキの歌をつくろうとずっと考えていたそうです。生命の尊さを歌い上げている福山さんの「クスノキ」、是非一度聞いてみてください。

我孫子市原爆被爆者の会

皆さんは我孫子市に原爆被爆者の会があるのをご存知でしょうか。

「我孫子市原爆被爆者の会」は昭和 54 年（1979 年）、我孫子市在住の広島・長崎で被爆した方々、約 160 名で発足しました。

設立の目的は、「会員の福利厚生　健康向上に協力し合い、併せて再び原爆の惨事が繰り返されないように世界平和のため寄与する」というもので、会員の方々はこれまで数多くの平和活動をなさっています。

「平和の折り鶴展」準備の様子

昭和 60 年、当時の会長が広島市に懇願し、被爆した旧市庁舎の敷石と側壁を譲り受け、市役所が手賀沼公園に記念碑を作りました。これが「平和の記念碑」です。毎年８月にはこの碑の前で一般市民の方にも参加して頂き、平和祈念式典が開催されています。（今年は８月 15 日（土）９時 30 分から開催されます）

他にも毎年「原爆写真と平和祈念の折り鶴展」をアビスタで開催したり、我孫子市平和事業推進市民会議にも参画したりと、積極的に活動をなさっています。

さらに、会員の方々が市内の小中学校で、被爆者としての体験談をもとに、戦争の悲惨さと平和の尊さを子供たちに伝えるという語り部活動もしてこられました。

戦後 70 年を迎えて皆さんご高齢となり、会員数は 31 名になったそうですが、会員の方々は今でも「原爆の悲惨さの記憶を風化させないために、若い世代に伝えていく活動を可能な限り続ける」という強い決意のもと、活動を続けていらっしゃいます。心から声援を送りたいと思います。

（我孫子市平和事業推進市民会議・M男）

【絵本の紹介】いわたくんちのおばあちゃん

書　名　いわたくんちのおばあちゃん
著　者　天野夏美(作)、はまのゆか(絵)
出版社　主婦の友社

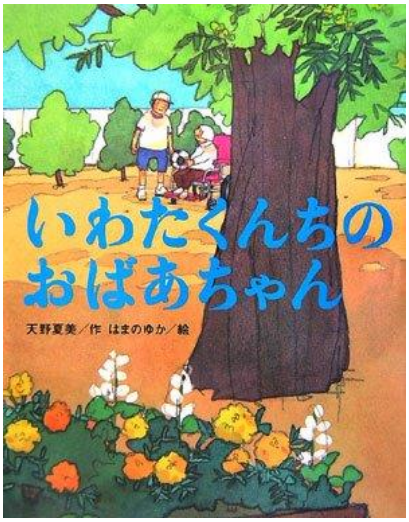
８月５日から７日まで広島を訪れた我孫子市内中学生 24 名は、６日の平和記念式典参列後、本川小学校に行きました。

岩田さんと息子さん。右奥に見えているのが被爆当時のまま保存されている校舎

本川小学校は爆心地から 410 メートル。爆心地から一番近い学校です。この小学校も被爆でたいへん大きな被害を受けましたが、被爆当時の校舎の一部が今でも保存されており平和資料館となっています。

この資料館を案内してくださったのが、ボランティアガイドの岩田さんとその息子さん。息子さん(いわたくん)は本川小学校の卒業生。岩田さん(お母様)は息子さんがこの学校の生徒だった時の PTA 活動を通じて、本川小学校平和資料館のガイドを始めたそうです。

息子さん(いわたくん)のおばあちゃん(ちづこさん)は、原爆で家族(両親と妹３人)を亡くされています。このちづこさんのことが 2006 年に「いわたくんちのおばあちゃん」という絵本になりました。



1945 年８月の初め、広島にも空襲が迫っているのではないかと家族全員で田舎に疎開することを決め、自宅に写真館の人を呼んで家族写真を撮ってもらったその何日か後に原爆が投下されました。

戦争が終わって何ヵ月か経ってから、ちづこさんを見つけた写真館の人が、ちづこさんに渡してくれたのだそうです。家族６人みんなで撮った写真、その写真を見ることができたのは、

ちづこさん一人だけでした。

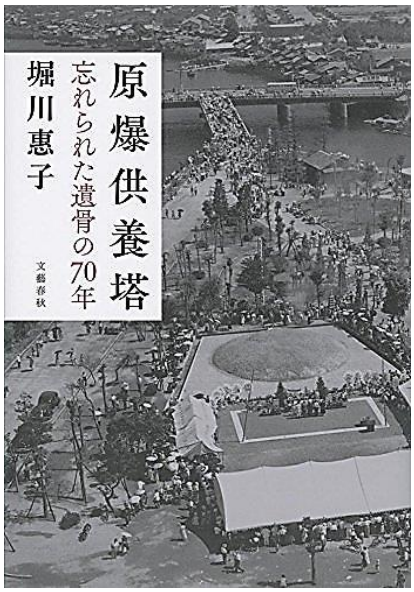
■本川小学校平和資料館

「いわたくんちのおばあちゃん」は、我孫子市民図書館に蔵書があり、我孫子市視聴覚ライブラリーに DVD もあります。是非、手にとってみてください。

■我孫子市視聴覚ライブラリー

（我孫子市平和事業推進市民会議　恒）

【本の紹介】原爆供養塔



－【本】－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
書　名　　原爆供養塔
著　者　　堀川 惠子
出版社　　文藝春秋
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

佐伯敏子さんに出会った堀川さんが書いたこの本は、親族 13 人を原爆で亡くした佐伯敏子さんが、原爆供養塔に通いつめ、名前がわかっていながら引取り手がなかった遺骨の遺族を探し続けて、「ヒロシマの大母さん」と呼ばれるようになったその半生を綴り、さらに病に倒れた佐伯さんの意志を継ぐかのように遺骨の身元探しを始めて、多くの人を訪ねて、初めて本当のヒロシマと向き合ったという著者自身の体験を伝えています。

70 年を経ても、決して終わることのない被爆の重い現実が伝わります。
是非、読んでいただきたい一冊です。

【広島市ホームページ】佐伯敏子さんの証言
【文藝春秋社】堀川惠子さんインタビュー「はじめて明かされる死者たちのヒロシマの物語」

今夏、広島市は原爆供養塔の内部を 10 年ぶりに報道各社に公開しました。
【朝日新聞】（被爆７０年）８１５の遺骨　供養塔で今も待つ
【毎日新聞社】原爆供養塔：遺骨８１５柱の遺族どこに　広島市、着手へ

広島市は、氏名が判明しながら遺族のわからない遺骨について納骨名簿を公開しています。
【広島市ホームページ】原爆供養塔納骨名簿の公開

（我孫子市平和事業推進市民会議　恒）

偵察機で臨んだ太平洋戦争の日々（田中三也さんにお話を聞く）

－【本】－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
書　名　彩雲のかなたへ
　　-海軍偵察隊戦記
著　者　田中三也
出版社　光人社
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

このたび『彩雲のかなたへ -海軍偵察隊戦記』の著者である我孫子市在住の田中三也さんに戦争の体験談を伺うことが出来ました。

偵察隊体験を語る
田中三也さん

（本来であれば、インタビュー記事全文を掲載したいところですが、田中さんは本誌にも戦争体験を寄稿してくださっているため、今回は、インタビューの最後に伺った「『彩雲のかなたへ』を書いた理由」以降を抜粋して、本誌に掲載しました。）

－「彩雲のかなたへ」を書いた理由－

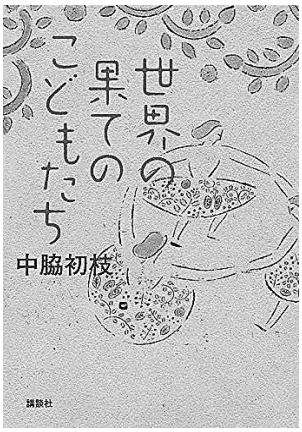
戦後になり、一部の人から「あの大戦で日本が負けたのは、ミッドウェー海戦での偵察隊の誤報が原因だ」とする説が出されました。その内容は、偵察隊の緻密な活動を知っている人間から見れば、実に許しがたいものでした。そこで知人から、反論となるような文章を書いてほしいと頼まれたのですが、私自身はミッドウェー海戦に参加していません。私が書けるのは、偵察員として自分が体験したことだけです。知人がそれで構わないと言ってくれたので、私は今まであまり知られていなかった偵察員、偵察機のことを事実のまま、世の中の人に伝えようと思ったのです。そして何よりも、私が今でも尊敬してやまない、中村子之助少将の仏前に供えたいという強い思いに駆られたものでした。

インタビューが終わり別れ際に、田中さんは微笑みながら「戦争は、本当に嫌なものです。絶対に起こしちゃだめですね」と一言おっしゃいました。実際に戦争を体験した重みを持ったその笑顔がとても印象に残りました。

（2015 年 8 月 22 日、我孫子市役所にて）

聞き手：我孫子市平和事業推進市民会議：田口・山田・小池

【本の紹介】世界の果てのこどもたち



書　名　世界の果てのこどもたち
著　者　中脇初枝
出版社　講談社

戦後 70 年にあたるからでしょうか。今年は、戦争の記憶を活字に刻み、戦後を振り返ろうとする本や映画が多いように思えます。
「世界の果てのこどもたち」も今年６月に出版された本です。

珠子は、家族とともに満州に渡って満州開拓団に参加、開拓団村に暮らすことになった珠子(たまこ)。珠子がその開拓団村に暮らしていた朝鮮人の美子(ミジャ)。横浜で裕福な家庭に育ち、父とともに満州を訪れた茉莉(まり)。ともに国民学校一年生であることは同じでも、それまでまったく違った環境で育ってきた三人の少女が戦時中の満州で出会い、時代の奔流によって離れ離れになっていきます。戦争が終わり、日本に帰国する茉莉、朝鮮での生活基盤を既に失っていた家族とともに日本に渡る美子、そして、母親から引き離され、中国に取り残される珠子。

愛情を注いでくれる中国人養親との暮らしの中でいつのまにか日本語さえ忘れてゆく珠子。横浜大空襲で肉親を失い施設で暮らすこととなる茉莉。38 度線による祖国分断に翻弄される美子。物語は、中国文化大革命の時代を経て、中国残留孤児の肉親捜しが始まる 1980 年代へと引き継がれていきます。

戦争の時代は、少女三人に互いの絆の深い記憶を刻んでおきながら、彼女たちの肉親やふるさとを奪い、彼女たちのアイデンティティまで根こそぎ揺るがしながら、三人を置き去りにしていきます。

少女たちを踏みにじっていく戦争の時代には、少しの容赦もありませんが、物語の最後に、茉莉が語る言葉に救いを感じます。

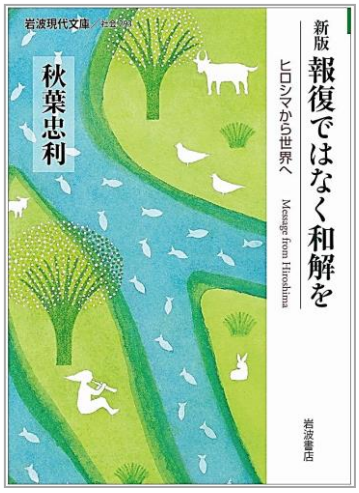
> いくらみじめで不幸な目に遭ってもね、享けた優しさがあれば、
> それをおぼえていれば、その優しさを頼りに生きていけるのね。
> それでその優しさを人に贈ることもできる。

この物語は、40 年もの間、少女三人を「果て」に追いやり続けた東アジア（中国・朝鮮・日本）の時代を語りながら、そうした時代の流れを超えてつながり続ける人の絆のかけがえなさを、読む者の胸に訴えてきます。

若い人に是非とも読んでほしい、強く薦めたい一冊です。

（我孫子市平和事業推進市民会議　恒）

【本の紹介】報復ではなく和解を



書　名　報復ではなく和解を
著　者　秋葉忠利
出版社　岩波書店（岩波現代文庫）

著者 秋葉忠利氏は、数学者として広島修道大学・広島大学などで教鞭をとった後、衆議院議員を経て、1999 年から 2011 年まで広島市長を３期務めました。

この本には、核の脅威に対してこれまで大きな抑止力となってきた被爆者が高齢化している今、平和を願うだけではなく、具体的に核を廃絶し平和を引き寄せるために、私たちはどうしたらよいのかを考えるヒントと勇気が、多く書き込まれています。

9･11 同時多発テロ以降、あってはならない「平和のための戦争」が公然と叫ばれ、実行（イラク戦争など）されるようになった 21 世紀にある私たちにとって、「想像力を駆使することで未来の世界のデザインを描き、その実現のためにはいくつものハードルがあったとしても、きちんと目標を掲げて努力することが大切」ということを、著者は、リンカーン大統領就任演説の“The Better Angels of Our Nature（私たち自身の中にあるよりよいもの）” を引用するところから始めて、そこにある私たちの希望と可能性を具体的に挙げて、説いています。

著者が説く「報復から和解へ」のパラダイムシフトの可能性から、以下の二点を紹介します。

①　自分たちを「少数派」だと思っていた人たちが、インターネット(SNS など)でつながることによって、実は「多数派」であることに気づき始めたという変化の可能性

これまで報道などにもなかなか取り上げられることのなかった平和を求める草の根の声が SNS などを通してつながるようになり、実は私たちは多数派だったと知ることによって、世界に届く草の根の声が力強く広がってきています。

②　国家単位の世界から都市単位の世界へと思考の枠組みを変えることによる可能性

国政ではなく地方自治の観点、国ではなく都市(最小の行政区画：市町村区)の単位の世界の思考に枠組みを変えることによってパラダイム転換の可能性が生まれます。市民との距離が近く、市民の多様性を包含することによって創造・文化・エネルギーを生みだす都市だからこその可能性があります。

著者が広島市長時代に推進した平和市長会議(現在の平和首長会議)の活動や、国内外の大学に開設を広めた「広島・長崎講座」の取組みもこれに連なるものなのだと思います。（昨年、中央学大学の「平和学講座(川久保文紀准教授担当)」も「広島・長崎講座」に認定されました）

「未来の世界のデザインを描き、努力すること」、それが我孫子で私たちが取組み、伝えていくべきことなのだと思います。

（我孫子市平和事業推進市民会議　恒）